

ドイツ小旅行記

その他のタイトル	Ein kleiner Reisebericht aus Deutschland
著者	年綱 静香
雑誌名	独逸文學
巻	63
ページ	121-126
発行年	2019-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018678

ドイツ小旅行記

年綱 静香

一年間のドイツ滞在、就学も就労の義務もなしとなれば一とはいえ先立つものは必要なのでアルバイト程度はしていたが一、やることは一つ、旅行である。それも日本からではおおよそ行き難いところ、欲を言えば時期の限られるものが良い。あとは気休な一人旅になるだろうから自分の趣味に忠実なものを一と心の赴くにまかせたら、ガイドブックにはあまり頁を割かれないラインナップとなった。今の時代インターネットを通じていくらでも情報は得られるが、ものの見方は人それぞれ、自分の足で行くが好し、と叶う限りで巡って来たので、その一部を記そうと思う。

ハルツ山地とブロッケン山

4月30日の夜、ブロッケン山には魔女が集い、年に一度の宴が行われる。ゲーテの戯曲『ファウスト』にも登場する「ヴァルプルギスの夜」で有名なこの山は、ドイツの真ん中よりほんの少し北に位置するハルツ山地にある。実はハルツを訪れるのは初めてではなく、大学在学中に夏季休暇を利用した語学セミナーでゲッティンゲンに滞在していたおり、週末の日帰り旅行でクヴェトリンブルクに連れて行って貰ったことがある。世界遺産にも登録されているファッハヴェルクハウスの街並みが美しく、店の窓辺に吊るされた、可愛らしいようで絶妙に不気味な魔女の飾りが印象に残っている。クヴェトリンブルクがブロッケン山の近くだと聞いて、魔女集会だ、ヴァルプルギスの夜だ、と一人密かに盛り上がった。とはいえ、当時は既に8月。饗宴の夜はとうに過ぎ去った後で、祭りの頃は如何様なものだろうと思いを馳せた。

故に4月の末に私がこの地を再び訪れたことは至極自然なことであったと言える。2月初頭に語学学校のあったハイデルベルクからデュッセ

ルドルフに移って来たので、ハノーファーを經由してまずは Goslar に降り立った。鉱山の町という名に引っ張られるのか、比較的黒い屋根の家が多いことも相まって、第一印象は鈍色だった。一先ず市庁舎を目指して旧市街を歩いていると、「WALPURGIS」と書かれた横断幕が目に入る。中心部に近づくほど蝙蝠や蜘蛛など魔女に因んだ装飾が増えて行き、観光案内所は無料でフェイスペイントを施してくれるらしく、なかなかの盛況振りであった。Goslar と言えば世界遺産のランメルスベルク鉱山が有名だが、少し駅から離れること、ヴェルニゲローデへの移動、鉱山自体の見学時間など諸々の理由により断念した。鉱山でトロッコに乗る代わりにビンメルバーン (Bimmelbahn) という観光列車に乗って旧市街を一周した後、Zinnfiguren-Museum という錫製の小さな人形の町で当時の暮らしぶりを眺めた。採掘の様子を再現した模型もあったから図らずも鉱山見学ができた気分であった。その後もいくつかの施設を見学した後、電車でヴェルニゲローデへ向かう。そこで一泊した後、明日は朝からハルツ狭軌鉄道でブロッケン山へ登る予定だ。

ヴェルニゲローデはハルツ山地の麓に位置する町だが、ブロッケン山頂までは登山電車で2時間程かかる。2本の尖塔が特徴的な市庁舎など、昨夕の薄暮れの中でさえ魅力的であった町並み散策への欲望に堪え、速足で駅に向かう。ハルツ狭軌鉄道の駅はDBの駅のすぐそばにあるから迷うことはない。旧市街を抜けて道を一本渡ったら、桜の並木が駅までの道をぽつぽつと彩っている。余談だが、ドイツにも桜はそれなりに存在する。ただ日本人が桜と聞いて一般的に想像する染井吉野よりも花の色が濃く、花卉が幾重にも重なった八重咲のもので、もこもことした様が愛らしい。私は常々、時間と財布が許すのであれば桜前線を追い駆けて旅をしたいと思っているが、ドイツでも花見ができたのは僥倖である。

閑話休題。ブロッケン山へはハルツ狭軌鉄道の運行する蒸気機関車で登る。登山客も多いと聞けが、列車で片道2時間の行程を徒歩で行く気力と体力、何より装備がない。往復の切符を購入し、列車に乗り込んだ。ヴェルニゲローデは始発駅だからかまだ乗客は少ない。山道のカーブで前を走る蒸気機関車を車窓から眺めたかったので、普段出入口をふさがれるのを嫌う私には珍しく窓側に座った。発車して暫くすると列車

は早速その身をくねらせて、黒い蒸気機関車に続く赤い客車が草の向こうに見える。後で気づいたのだが、本腰を入れて山を登り始めると木々を周り込む形で蛇行するので、後方車両から先頭車両を確認するのは難しく、一番ははっきりとその姿が見られたのはこのときであった。

列車内の席は二人掛けの椅子が対面で並ぶボックス席型だったが、いくつか途中駅を過ぎて乗客が増えて来た頃、私の向かいには一人の老翁が座っていた。当初はお互い無言だったが、なにせ片道2時間かかるうえ、劇的な景色の変化がある訳ではない。少々行路に飽いたところで向かいの御老人が話し掛けて来た。私が多少なりともドイツ語を解すると知ると、道中いろいろと説明してくれた。どうやら彼はこの地方に詳しいらしい。国立公園も擁するハルツ山地だが、標高が上がるにつれ、灰色に枯れたような木々が目立つようになる。ハルツ山地に立つ木々の多くは Fichte—唐檜、マツ科の植物で落葉するような種類ではないので不思議に思っていたが、どうやら本当に枯れてしまっているらしい。現在ハルツに植わっている多くは元々この地にあった木ではなく、他所から移植したが、気候に適用できず本来より短い期間でその寿命を終えてしまうのだとか（何故原生の木々でなくなってしまったかも聞いたのだが忘れてしまった。火事か虫害かのどちらかだったと思う）。

山頂には旧テレビ塔と博物館がある。ハルツ山地について紀行文を残したハイネとゲーテのモニュメントもあるが、そういった文学的な要素よりも旧東ドイツ領時代の展示品が多く、人々の足も主に其処で止まる。なんとなくドイツ人の戦後教育の影響を見た気がした。

ブロッケン山の標高は 1,142m だが、気候自体は 2,000m 級の山に匹敵する。おまけに風が強い。空に染みがあると思ったら鳥だった。つまり頗る寒いので、乗って来た電車の次の電車で山頂を後にした。ヴェルニゲローデに戻って一通り旧市街を満喫したら城に向かった。この時期は連日催しがあるようで、その日は中世の騎士や傭兵に扮した人で賑わっていた。30 日当日は魔女や悪魔で溢れる。ハロウィンを彷彿させる仮装だが、日本のものよりも統一感があった。夕方になると彼らは鉄道に乗り、ブロッケン山頂にて一晩中飲めや踊れやの宴を催すのだ。ここまで来たら参加するのかわれそうだが、生憎と私は下戸だし、派手な騒ぎは遠慮したい。“魔女の窟”という名前の店で、ドイツの春の名物

である白アスパラガスに舌鼓を打って晩餐とした。なお、バターで炒めただけのシンプルな味付けなのに軽く感動するくらい美味であった。白アスパラガスの旬は1ヶ月程度だが、ドイツ全土で食べられるので、春のドイツを訪れた際には是非味わって欲しい。

メルンと希代の奇人

「ティル・オイレンシュピーゲル」は14世紀に北ドイツに実在したとされる人物で、遍歴職人や道化に扮しながら旅をし、様々な身分の人々をその頓智でやり込めて行く。その軽妙さが爽快で、ドイツでは誰もが知る悪戯の達人であるが、ドイツ文学に親しくなくとも音楽好きであれば、リヒャルト・シュトラウスの交響詩『ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら』で馴染みのある人もいるだろう。北ドイツの町メルン（Mölln）はそんな伝説的奇人の最期の地とされている。

北ドイツで特徴的な赤煉瓦の建物が立ち並ぶメルンだが、観光の拠点となる案内所は坂を上った先にある。真っ直ぐに来れば広く緩やかな坂道を通るのだが、私は少し行き過ぎてしまったが故に、比較的急勾配の坂を上ることになったものの、見通しの悪い所から急に視界が開けるのが気持ち良かった。広場を挟んで真正面にあるのが案内所で、その右隣には教会が見えるが、オイレンシュピーゲルの墓標はそこにある。ちょうど私が抜けて来た道の隣にオイレンシュピーゲルの博物館があり、今回の旅の目的は此处であった。話の一場面を再現した展示などがあるなか、どこかで見たものがあると思えば、岩波文庫の阿部謹也氏訳『ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら』であった。過去この博物館を訪れた日本人からの寄贈であるようだが、博物館からのメッセージに「ところで、日本人は何故オイレンシュピーゲルのように後ろから前へ本を読むのだろうか」と添えてあって、習慣が異なれば常識も奇行かと面白く思った。

ガルミッシュ＝パルテンキルヒェンとツークシュピッツェ

ツークシュピッツェと聞いて思い出すのは、ケストナーの児童文学小

説『飛ぶ教室』の前書きだ。真夏にクリスマスの物語を書こうとしたケストナーが、その時期でも雪が見られる場所を求めて向かったのが、ドイツ最高峰のツークシュピッツェだった。興味はあったが前述の事情により登山は厳しい。そう思っていたら友人から山頂まで登山電車とロープウェイで行けると聞き、晴れて旅程に組み込むことと相成った。

ツークシュピッツェはドイツとオーストリアの国境にあるので双方から向かうことができるが、ドイツ側のガルミッシュ＝パルテンキルヒェンから向かうことにした。というのも、この町はミヒャエル・エンデの出生地で、KurPark という彼の作品に因んだオブジェを飾った公園があるらしいのである。何があるのかは分からなかったが、『モモ』に出て来るカメのカシオペイアはいるのではないかと期待したら、果たしていた。立札はなかったが、小山の周りに並ぶ石の一つがカメの頭であったから間違いないだろう。カシオペイアと言えば、甲羅に文字を浮かび上がらせて会話することができるのが印象的であった。その背に何が書かれているのか気になったが、ちょうど男の子がまたがっており確認は断念した。

さて、肝心のツークシュピッツェだが、まずそれ以前にアルプスの山脈に感動した。山に近い場所で育ったので、通常山に心動かされることはあまりないのだが、白い巨大な壁が聳える様は壮観だった。登ってから気づいたのだが、雪のように見えていたのは白い岩で、こういった種類の山は日本ではなかなかお目にかかれないのではないかと思う。

感動したと言えばもう一つ。アイプゼーなる湖である。本来はここからツークシュピッツェ山頂までを繋ぐロープウェイが出ているのだが、生憎明け方に降った雨の影響かその日は運航を停止していた。そのため登山電車の車窓から拝むこととなったのだが、眼下に広がる碧色の湖は、息を呑む美しさだった。他所の地名を出すのも野暮だが、沖縄の海だとか、ああいう暖かい所の綺麗な海みたいな色だった。

登山電車で登る場合、途中からは殆ど山肌に掘られたトンネルを潜って行くことになるので落下の心配はない。其処を抜けたらロープウェイに乗り換えて遂に山頂に至るのだが、乗る前は晴れていたのに、降りたら辺り一面霧でほとんど何も見えなかった。急に天候が変化したとかで

はなく、下れば変わらず晴れているのだから、山とは不思議なものである。

ドイツの魅力の一つに、訪れる場所によって受ける印象が全く異なるということが挙げられると思う。建物一つとっても、煉瓦の釉薬が艶やかであったり、壁画が鮮やかであったり、木組みであったりと、なかなか多彩だ。海が見えるところでは山が見えないし、山があれば海がない。近代的な都市もあれば、歴史を感じる都市もある。所変われば暮らす人の気質も変わるが、道中出会った人々には何処でも親切にして貰ったのでその点は安心して良い。著名な観光地は勿論素敵だが、少し足を延ばして自分の気に入りの街を見つけるのも一興ではないか。